

## 実践報告

# 新カリキュラム基礎看護学実習Ⅱ（地域で暮らす人々との共生） 実習プログラムの開発

穴水千尋 小川純子 永田文子 坂井志織 篠原良子 渡邊多恵子  
淑徳大学看護栄養学部看護学科

## Development of a new curriculum for the basic nursing practice II (symbiosis with people living in the community) practice program

Chihiro Anamizu, Junko Ogawa, Ayako Nagata, Shiori Sakai, Yoshiko Shinohara, Taeko Watanabe  
School of Nursing, College of Nursing and Nutrition, Shukutoku University

### 要旨

**目的：**基礎看護学実習Ⅱ（地域で暮らす人々との共生）実習プログラムの開発のプロセスおよび概要について報告し、次年度以降の課題について検討することである。

**方法：**筆者らは2022年5月からワーキンググループを立ち上げ、基礎看護学実習Ⅱの開発に携わった。実習プログラムの開発においては、本学科の教育課程の編成・実施方針を踏まえた上で、各ガイドラインを参考にしながら、臨地実習ルーブリックの達成レベルを考慮し、実習目的・目標を検討した。さらに、実習内容・方法については、旧カリキュラムの実習内容や本学総合福祉学部の実習施設を参考にし、基礎教育科目、専門基礎科目、看護専門科目での学修状況を確認しながら、「地域」、「生活の場」、「多様性」、「包括性」といったキーワードを軸にプログラムを構築した。

**結果・結論：**実習目的・目標を達成できるとともに、学生が主体的に学びながら看護実践能力を高め、講義・演習と結びつく実習経験となることが重要である。今後も実習プログラムの評価を継続して行い、本学科の独自性のある実習プログラムとなるように実習方法・内容を検討し続けていくことが求められる。

**キーワード：**多様性、共生、看護基礎教育、カリキュラム改正

**Key Words:** diversity, symbiosis (living together), basic nursing education, curriculum revision

## I. はじめに

近年の疾病構造の変化や少子高齢多死社会への急速な移行は、医療体制の大きな変革を社会に要請し、看護基礎教育においても第5次カリキュラム改正が2022年度から適用されることとなった。その中で、地域医療構想の実現や地域包括ケアシステムの推進、患者ニーズの多様化・複雑化に対応できる看護師の育成が中心的な課題となっている。従来通りの病院看護だけではなく、幅広い視野を持ち多様な場で活躍できる看護師が希求され

ていると言える。しかし、基礎教育という限られた時間と資源の中でこの課題を達成するのは容易ではない。上述の看護師育成の根底となる能力を検討したところ、本学看護学科の教育目標のひとつである「共生の精神を基盤とし、人々の尊厳と人権を擁護しうる高い倫理観を養い、看護専門職者として、対象者にとっての最善について考え、行動できる能力を培う」ことであると考えられた。

そこで、講義科目だけではなく臨地実習を通して“行動できる能力を培う”必要があると考え、新たな実習プログラムとして、基礎看護学実習Ⅰ

(看護を知る)・基礎看護学実習Ⅱ(地域で暮らす人々との共生)・基礎看護学実習Ⅲ(看護職者に学ぶ共生)・基礎看護学実習Ⅳ(看護実践場面における共生)を設定した。なかでも2年次前学期に行われる基礎看護学実習Ⅱ(地域で暮らす人々との共生)(以下、基礎Ⅱ実習とする)は従来の実習プログラムとは大きく異なる新しい内容の実習であり、新たなプログラムを検討する必要がある。さらに、この4つの実習はカリキュラムの根幹となる科目と位置づけられ、本学科のすべての教員が協働し、基礎看護学実習Ⅰから基礎看護学実習Ⅳまで学生が学修と経験を積み重ねられるようにしていく実習である。看護師としての実践能力を育むためには、臨地実習の内容を充実させていくとともに、実習指導にあたる教員が新カリキュラムでの基礎Ⅱ実習を展開・指導していくための研修やディスカッションの機会をもつことは重要である。

基礎Ⅱ実習は、地域で暮らす人々の価値観や生活の多様性を理解することを目的としている。新たな実習プログラムの構築に際し、看護における多様性に関連した先行研究を概観すると、看護職の人材確保に関連する多様性、看護の対象となるものの多様性について多く報告されている。

看護職の人材確保に関連する多様性においては、2008年に経済連携協定(EPA)に基づく外国人看護師候補者の受け入れが開始しており、異文化や看護業務内容の差異の現状に対して当事者も受け入れ側も共通認識をもつことの必要性(掛谷 2021)が示されている。また、看護職の働き方も多様化しており、スペシャリストやジェネラリスト、管理者や研究者、教育者など多様なキャリアが確立されている(谷口 2020)。さらに、離職することなく働き続けられる環境を整えることやワークライフバランスを考慮した勤務調整なども課題である。このように、看護の現場において多様な人材や多様な働き方を認めて協働していくというダイバーシティの観点が問われている現状が窺える。

看護の対象となるものの多様性においては、外国人患者との効果的なコミュニケーションや対応能力向上の課題(岩田 2021, 谷本 2020)、宗教的配慮をふまえた看護ケアの実態(甲斐 2019)、家族の構造や関係性の多様化による実状を看護基礎

教育から教授していく必要性(佐藤 2018)などが報告されている。看護を実践していくうえでは人々の尊厳を守ることが求められるが、そのためには看護の対象となる人々を包括的に理解することが前提となるということが理解できる。

2016年には厚生労働省より地域共生社会の実現に向けた取り組みへの提言(厚生労働省 2016)が示されており、日本看護協会(2016)においても地域共生社会では、看護職における地域づくりの視点も求められると指摘されており、高齢者=サービスを受ける人と限定せず、病気や障害を持っていてもその人が活躍できる状況を想定し、環境を整えることも看護職の重要な役割の一つであるとしている。このように、看護職は地域という生活の場において、「多様性」を理解し共生していく視点をもつことが求められているといえる。他方で、「多様性」の定義は難しく、「みんな違ってみんないい」という主張は多様性という言葉によって、異なる見解を切り捨てることにつながる危険性ははらんでいることも指摘されている(山口 2022)。以上をふまえて、新カリキュラムにおける地域で暮らす人々の価値観や生活の多様性を理解することを基盤とする基礎Ⅱ実習の構築を試みることにした。本稿では新カリキュラムの初年次に行った基礎Ⅱ実習の開発のプロセス、概要について報告し、次年度の課題について検討する。

## II. 目的

基礎Ⅱ実習プログラムの開発のプロセスおよび概要について報告し、次年度以降の課題について検討することである。

## III. 方法

筆者らは2022年5月からワーキンググループを立ち上げ、基礎Ⅱ実習の開発に携わった。実習プログラムの開発においては、淑徳大学看護栄養学部看護学科の教育課程の編成・実施方針を踏まえた上で、看護学教育モデル・コア・カリキュラム(文部科学省 2017)や看護基礎教育検討会報告書(厚生労働省 2019)、看護学実習ガイドライン(文部科学省 2020)を参考にしながら、本学科で運用している臨地実習ルーブリック(実習をとおして

身につける力)「共生」・「倫理的側面」の達成レベルを考慮し、実習目的・目標を検討した。さらに、実習内容・方法については、旧カリキュラムである老年看護学実習Ⅱの実習内容や本学総合福祉学部の実習施設を参考にし、基礎教育科目、専門基礎科目、看護専門科目での学修状況を確認しながら、「地域」、「生活の場」、「多様性」、「包括性」といったキーワードを軸に実習プログラムを構築した。

#### IV. 基礎看護学実習Ⅱ(地域で暮らす人々との共生)の概要

##### 1. 実習目的・目標

###### 【実習目的】

地域で暮らす人々の生活や価値観が多様であることに気づき、他者を尊重する必要性を理解し、看護専門職の基盤となる倫理感を涵養する。

###### 【実習目標】

- 1) 地域で暮らす人々の健康状態・生活は多様であることを理解できる。
- 2) 地域で暮らす人々の価値観が多様であることを理解できる。

- 3) 地域で暮らす人々の生活や価値観を尊重する態度を示すことができる。
- 4) 多様性の共有を通して、包括性について考えることができる。
- 5) 地域で暮らす人々との共生について考えることができる。
- 6) 看護専門職にとって、多様性を理解する意味を考えることができる。

##### 2. 実習スケジュールと学生配置(図1)

本実習による教育効果、実習時間外に必要な学修を考慮し、2単位60時間の構成とした。その理由として、実習時間外に「学生が個々の実習を振り返り、自身で実習体験を意味づけられるようにする」ことで、より実質的な学修とするためである。実習期間は10日間設けられているが、グループごとに実習スケジュールを入れ子式とし8日間のプログラムを構成した。グループは1学年を5グループに分け、1グループ20～21名の学生を配置し、実習プログラムに応じてグループ人数を検討しながら、様々な学生とグループワークを通して学びを共有できるように少人数のグループを編成した。

グループ		1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目		
A	A-1	オリエンテーション	臨地実習 ① いきいき	学内実習 ①	臨地実習 ②	大巖寺・淑徳アーカイブズ見学実習		学内実習 ②		実習の振り返りとまとめ①	実習の振り返りとまとめ②		
	A-2												学内実習 ②
B	B-1		学内実習 ①	臨地実習 ① いきいき			学内実習 ①					臨地実習 ②	学内実習 ②
	B-2												
C	C-1		学内実習 ①		臨地実習 ① いきいき				学内実習 ②				臨地実習 ②
	C-2												
D	D-1			臨地実習 ②	学内実習 ①				学内実習 ②			臨地実習 ① いきいき	学内実習 ②
	D-2												
E	E-1		臨地実習 ②	学内実習 ①			学内実習 ①					学内実習 ②	臨地実習 ① いきいき
	E-2												

図1 基礎看護学実習Ⅱ(地域で暮らす人々との共生)実習スケジュール

### 3. 教員の事前研修

基礎Ⅱ実習は、これまでの実習プログラムにはなかった新しい内容の実習であるため、実習指導を担当する教員が2つの研修を受講した。1つ目は学生が多様性を学ぶことを促すために、「多様性ファシリテーター養成講座」を受講した。この講座では多様性（ダイバーシティ）と人権の概念および参加型学習の理論と実践技術を学び、基礎Ⅱ実習プログラムの構築に適用していくことが目的である。

2つ目はアクティブラーニングの手法の一つでもある「哲学カフェ」について、教育場面での活用についての講義を受けた。哲学カフェの特徴であり本実習につながる点として、様々な価値観の元で唯一の正解を出すことが難しい事柄にいかに向き合い問いを更新していくのか、その基本的な考え方を学んだ。また、哲学カフェのファシリテーターに求められる考え方や、ファシリテート方法についての要点を押さえた。

上述の研修を通して、教員は人間関係のトレーニングとしての知識・技術、ファシリテーターに必要な実践上のスキルやコツを活用し、学生指導にあたれるようにした。

### 4. 実習への導入

#### 1) 事前課題

基礎Ⅱ実習開始前の事前学習として、以下の内容を提示した。各プログラムに関連する事前課題はそれぞれの項目で後述する。

- ①「多様性」「共生」「利他」の理解：実習の基盤となる3つの概念について、課題図書として提示した中から学生が選択した図書を1冊読み、要旨と印象に残ったことを記述する。印象に残ったことについては、学生自身の実体験を踏まえて記述できるように指定した。
- ②大巖寺実習における準備：写経体験は正座で実施するため、正座で長時間座るための工夫を調べ、練習と実践を課題とした。さらに、檀家との対話のプログラムに関する事前課題として、檀家について事前に調べ、檀家への質問項目を考えることを提示した。
- ③地域における実習（臨地実習）：地域における実

習ではいきいきプラザ・センター実習で高齢者との交流の場があるため、高齢者と会話をする際の配慮について考えることを提示した。

- ④学生自身の多様性に対する個人の適応力に関わる現状や変化をとらえることができるように、実習前後で「多様性適応力測定尺度」（津々木，2015）を用いたアンケートに回答してもらった。

#### 2) 主体的な実習のための取り組み

基礎Ⅱ実習では、学生の主体性を育むために実習に関連する事前準備や片付けに参加できるようにスケジュールを組むこととした。学生が協力して実習を作り上げるプロセスを体験することで、共生の意味を考え、主体的に実習に取り組むことができるように計画をした。

#### 3) オリエンテーション

基礎Ⅱ実習初日のオリエンテーションにおける到達目標は以下5項目を設定した。

##### 【到達目標】

- 実習の目的・目標が理解できる
- 自分の実習スケジュールを記入できる
- 自分の実習先の特徴と実習先への行き方を調べることができる
- 看護学生として適切なみだしなみやマナーについて述べるることができる
- 多様性を理解する意味を考えることができる

オリエンテーションの内容として、実習目的・目標、実習スケジュール、実習施設・学内演習におけるマナー、守秘義務・個人情報保護の徹底など確認を行う。多様性を理解する意味を考えるためのオリエンテーションプログラムについては以下に示す。

- ①アイスブレイク：基礎Ⅱ実習では、実習プログラムに応じてグループ人数を検討しながら、様々な学生とグループワークを通して学びを共有できるように少人数のグループを編成する。そのため、ワークへの積極的な参加や緊張の緩和、コミュニケーションを円滑にすることを目的にアイスブレイクの時間を持つこととした。
- ②哲学カフェ：多様性を考える基礎Ⅱ実習においては、身だしなみを一律に規正するのではなく、臨地実習施設の規定がない場合は学生が自分で考え・行動し、社会の反応を自分で受け止める

ことも学びとして組み込んだ。これらについて考えることを支援する仕掛けとして、「身だしなみと印象を考える」をテーマに外部講師を招聘し、哲学カフェを実施することとした。普段は当たり前すぎて改めて考えることがなかった事柄について問い直す作業を、対話を通して参加者全員で行っていくことが哲学カフェの基本精神である。それ故、正解を求めたり、合意したりすることが目的ではなく、それぞれの経験をお互いに見つめ、問い続けていくことを重視したプログラムとなっている。この哲学カフェでの経験をふまえて、学生自身が基礎Ⅱ実習期間中の身だしなみについて考え続けることができるようにプログラムを検討した。

- ③靴下ワーク：同年代という同質性の高い集団における“小さな多様性”について、演習を通して気づくことを目的としたプログラムである。具体的なワークとしては、学生それぞれの靴下の干し方とたたみ方を実施・説明し、グループ間での学びの共有を行う。それを通して、学生個々が育ってきた環境や過程には、それぞれの文化や価値観が内包されていること、靴下の扱一つにおいてもそれが反映されることを学べる仕組みとした。

## 5. 地域における実習（臨地実習）

地域における実習では、いきいきプラザ・センター実習（臨地実習①）と地域の様々な施設での実習（臨地実習②）として、それぞれ1ヶ所の実習施設での臨地実習を行う。

### 1) いきいきプラザ・センター実習

いきいきプラザ・センター（表1）は千葉市社会福祉協議会が千葉市から委託を受けて運営しており、60歳以上の高齢者が、健康で生きがいのある生活が送れるように、日常生活の悩みごとや健康相談に応じたり、健康増進を目的にレクリエーション活動を行ったりすることができる施設である（千葉市 2023）。利用者との関わりを通して、地域で暮らす高齢者の健康状態、生活を理解することができるようにプログラムの構成を検討した。いきいきプラザ・センター実習（臨地実習①）の到達目標は以下5項目を設定した。

表1 いきいきプラザ・センター実習

	施設名
1	中央いきいきプラザ
2	蘇我いきいきセンター
3	花見川いきいきプラザ
4	花見川いきいきセンター
5	さつきが丘いきいきセンター
6	稲毛いきいきプラザ
7	あやめ台いきいきセンター
8	若葉いきいきプラザ
9	大宮いきいきセンター
10	都賀いきいきセンター
11	緑いきいきプラザ
12	越智いきいきセンター
13	土気いきいきセンター
14	美浜いきいきプラザ
15	真砂いきいきセンター

### 【到達目標】

- 利用者を尊重した態度をとることができる
- 利用者と一緒に活動をする、話しかけるなど実習に積極的に参加することができる
- いきいきプラザ・センターを利用する理由から話を広げて、利用者の生活や健康について話を聞くことができる
- いきいきプラザ・センターを利用する理由と高齢者の発達課題をつなげて考察することができる
- 学ぶ意欲を持ち、実習指導者に積極的に質問することができる

### 2) 地域の様々な施設での実習

地域の様々な施設（表2）とは、主に疾病や障がいをもつ人のための通所および入所施設、小児・高齢者のための福祉施設、子育て支援施設、在住外国人のための施設である。施設での見学を通して、地域で暮らす人々の健康状態、生活を理解することができるようにプログラムの構成を検討した。地域の様々な施設での実習（臨地実習②）の到達目標は以下6項目を設定した。

表2 地域の様々な施設での実習

	施設名	施設の概要
1	千葉県立仁戸名特別支援学校	特別支援学校
2	千葉県立袖ヶ浦特別支援学校	特別支援学校
3	千葉市国際交流協会	外国人支援施設
4	子育てひろば・ちどり	子育て支援施設
5	子育てひろば・いなげ	子育て支援施設
6	子育てひろば・みつわだい	子育て支援施設
7	ふれあいひろば・輝	子育て支援施設
8	子育てひろば・うたせ	子育て支援施設
9	子育て支援館	子育て支援施設
10	障害者支援施設 永幸苑	障がい者支援施設
11	社会福祉法人千葉アフターケア ハピネス浜野	身体障がい者療護 施設
12	ライオン工房	ろう重複障がい者 支援施設
13	若葉泉の里	障がい者支援施設
14	千葉県千葉リハビリテーション センター（外来）	リハビリテーション 外来

【到達目標】

- 地域で生活している疾病や障がいをもつ人のための通所施設、小児・高齢者のための福祉施設、子育て支援施設、在住外国人のための施設における活動を知ることができる
- 地域で暮らす人々の健康状態や生活の支援内容を知ることができる
- 多様な人々が地域で暮らす人々の生活や価値観を尊重する関わりについて考え、言語化することができる
- 利用者を尊重した態度をとることができる
- 利用者／患者／学生と一緒に活動をする、話しかけるなど実習に積極的に参加することができる
- 学ぶ意欲を持ち、実習指導者に積極的に質問することができる

3) 実習方法・内容

臨地実習ではグループに分かれて、いずれかのいきいきプラザ・センター、地域の様々な施設での見学実習を行う。日常生活への支援においては、見学だけではなくスタッフと一緒に実施することや、施設での活動に利用者とともに参加するなど実習施設に合わせた方法を検討した。地域で生活

する人々の多様性を理解するためにはコミュニケーションをとって、対象者の生活や価値観について利用者の方々に教示いただくことが必要であると考え。さらに、そのコミュニケーションにおいて、利用者を尊重した態度について、学生自身が考えることができるように支援する。

4) 学生の学修状況・取り組みに合わせた支援

本学科では基礎Ⅱ実習と同時期の2年次前学期に老年看護学概論や小児看護学概論、母性看護学概論が開講しており、それぞれの看護分野の特徴や対象者の発達段階に合わせた看護支援のあり方について学修を行っている。そのため、地域の様々な施設での実習（臨地実習②）（表2）においては、学生から事前に関心のある分野や施設について調査し、できる限り希望の施設に配置できるようにグループ分けを行った。教員は巡回を行い、カンファレンスを通して実習の振り返りや今後の課題の明確化ができるように支援を行う。

6. 大巖寺・淑徳アーカイブズ見学実習

大巖寺・淑徳アーカイブズ見学実習では、本学の学祖、長谷川良信先生の社会事業への取り組み、大学設立ならびに本学の歴史や諸活動について理解し、本学の建学の精神である利他共生とは何かを考えることができるようにプログラムを構築した。利他共生とは、「他者に生かされ、他者を生かし、共に生きる」という意味である（淑徳大学2023）。地域で生活する人々の健康状態・生活・価値観が多様であるということを理解するとともに、共に生きていくことについて考え続けることができるように、プログラムの構成を検討した。大巖寺・淑徳アーカイブズ見学実習における到達目標は以下6項目を設定した。

【到達目標】

- 学祖長谷川良信先生がどのような思いで社会事業をおこし、大学の設立をしたか説明できる
- 法要（音楽）の意味を説明することができる
- 三宝礼、帰敬文、懺悔文、回向文の意味について説明することができる
- 写経を実施する意味について考えることができる
- 檀家に対して尊重する態度で接し、考えや価値観を引き出すコミュニケーションをとることが

できる

- 利他共生とは何か、自分の言葉で説明することができる

### 1) 実習方法・内容

大巖寺実習では本学の設立の意味や利他共生の精神について考えることができるように、本学の理事長である長谷川匡俊先生のお勤め、法話、音楽法要に参加し、音楽法要の意味や利他共生についてお話をうかがうプログラムと淑徳アーカイブズの見学を設定した。また、写経における目的・方法の説明を受け、写経を実施する意味を学生自身が考えることができるように、大巖寺で写経を体験できるプログラムを構成した。そして、地域における実習（臨地実習）で学んだ対象者を尊重するコミュニケーション方法の実践をふまえ、対象者の考えや価値観を引き出すコミュニケーションについて考え、実践することができるように、檀家との対話のプログラムを設定した。

### 2) グループワークの概要

グループワークでは、写経の経験をとおして今後どのようなことに活用できるのかについて、ディスカッションを行う。また、臨地実習ループリック（実習をとおして身につける力）の「共生」（図2）を熟読し、5つの観点の内容理解のためのディスカッションをとおして、学生自身が経験した「気づかい気づかわれる関係の体験」を振り返り、共有を行う。

### 3) 学生の学修状況・取り組みに合わせた支援

本学科では1年次後学期に共生論を受講しており、建学の精神である「利他共生」を正しく理解するとともに、本学で学ぶことの意義や意味を共に考えてきている。そのため、今回の大巖寺実習における体験と自己の経験、これまで学修してきた内容を想起し、関連付けて振り返ることができるようにファシリテートを行う。また、実習期間も折り返しになり、これまでのグループワークを振り返りながら、学生がアサーティブなコミュニケーションができるようになるための練習の機会にするとともに、「違う意見に価値がある」ことに気づくことができるように促す。

## 7. 学内実習①—模擬体験を通して健康状態や生活の多様性を理解する—

学内実習①では妊婦、高齢者、障がいをもつ人（片麻痺）の模擬体験を通して健康状態や日常生活について知り、地域で生活する人々の多様性を理解することができるようにプログラムの構成を検討した。学内実習①における到達目標は以下3項目を設定した。

### 【到達目標】

- 妊婦、高齢者、障がいをもつ人（片麻痺）の日常生活の状況を考えることができる
- 模擬体験を通して、対象者の心身の状態や日常生活の状況を知ることができる
- 模擬体験をもとに、地域で生活している妊婦、高齢者、障がいをもつ人（片麻痺）と「ともに生きる」ために大切なことや求められることを考え、言語化することができる

### 1) 実習方法・内容

学内実習①では、まず、事前学習として各自で指定されたワークシートを用いて、妊婦、高齢者、障がいをもつ人（片麻痺）の日常生活を送る上での特徴や留意点についてまとめる。その上でグループワークに参加する。グループメンバーは3～4名とし、妊婦、高齢者、障がいをもつ人（片麻痺）のいずれかの模擬体験をグループメンバー全員が実施できるようにプログラムを設定する。学生のグループ内役割としては、①実施者、②介助・補助者、③記録係とした。各グループが、どの模擬体験を実施するかについては、当日にくじ引きを行って決定する。模擬体験では、大学内の施設を使用し、日常生活動作および手段的日常生活動作を中心に実施することを検討した。まずは、模擬体験を開始する前の状態で、体験場所や内容を確認し、安全を考慮したうえで模擬体験を開始できるようにする。日常生活動作および手段的日常生活動作の内容（表3）は対象者が日常生活を送るうえで困難を感じたり、サポートを必要としたりする場面を想定して設定し、複数の場面を組み合わせる体験できるようにする。

### 2) グループワークの概要

グループワークは、模擬体験実施前・中・後の3段階に分けて実施する（4名グループの場合は、

## 臨地実習ルーブリック(実習をとおして身につける力)「共生」

「共生」とは利他共生、【他者に生かされ、他者を生かし、共に生きる】ということを目指す。看護における利他共生は、「ひととしてのその人の在り方に関心を寄せ、深く感じる姿勢をもつ」、「気づかい、気づかわれる関係の中で対象者に配慮をもった気づかい(看護)を行う」、「気づかいを通して、自らの気づかひの意味に気づき、多くの人にその意味をもった気づかいを実践していく(感恩奉仕)」、「自らの気づかひの意味(『観』)について意識化し、他者に伝えることができる」ことを通して、体現される。そのため臨地実習では、対象者に生じた問題を解決するプロセスの中で、この利他共生、“together with him”の思考と行為と感情を一体のものとして体現できることを目指す。

観点・定義	レベル				
	4	3	2	1	0
<p>1. 関心／感心をもち共にいる姿勢・態度を示す</p> <p>定義；対象者がおかれている状況や対象者の考え、生き方を深く敬い、関心を寄せて寄り添う姿勢・態度を持つ。</p>	対象者の背景を認識し、対象者と共有しながら背景を踏まえて関わった	対象者への関わりの一部において、対象者の考えや生き方とその背景を踏まえた関わりを実践した	他者のサポートを得て、対象者の考えや生き方とその背景を部分的に理解し、言語化することができた	対象者の考えや生き方を理解しようという姿勢で関わろうとした	対象者の考えや生き方とその背景について考えることができなかった
<p>2. 互いを気づかい、気づかわれる関係を構築できる</p> <p>定義；してあげるといふ一方的なかかわりではなく、対象者が自分に向けている気づかいについて理解し、関係の構築につなげる。</p>	対象者に必要な気づかひを向けるとともに、対象者が自分に向けた気づかひを受け止め、相互に理解し合える関係を構築した	対象者に必要な気づかひを向け、看護を提供できる関係を構築した	対象者に必要な気づかひを向けたが、対象者が自分に向けた気づかひを受け止める余裕はなかった	対象者を気づかおうと努力した	自分のことで精一杯で、対象者を気づかう視点に欠けていた
<p>3. 配慮を持った関わりを実践できる</p> <p>定義；看護の意味を見出し、対象者と互いに成長するための姿勢・態度を持つ。</p>	対象者がおかれた状況や思いを理解・共感し、互いに影響し合う存在として意思疎通を図りながら看護を実践した	対象者の価値観を尊重した合意形成へ向けたプロセスをふみながら看護を実践した	対象者の背景を考慮し、対象者にとっての必要性を判断して個別性のある看護を実践した	専門的知識を活用し、一般的に必要な看護を実践した	対象者に提供されている看護を模倣しながら看護を実践した
<p>4. 生かされていることへの感謝を、他者への奉仕として返す</p> <p>定義；自分の周囲にいる人との関わりの中で、他者に生かされている自己に気づき、その人々に感謝の思いを言葉や実践を通して表現し、利他共生を体現した</p>	周囲の人々に生かされている自己に気づき、その人々に感謝の思いを言葉や実践を通して表現し、利他共生を体現した	自分自身の実践が関わった人々に与えた意味や影響と、自分自身が関わった人々から与えられた意味や影響について明らかにした	自分自身の実践が、対象者にとってどのような意味や影響を与えたのか振り返りながら看護を実践した	感謝の思いを周囲の人々に還元できなかった	自分を支えてくれる他者の存在に気づくことができなかった
<p>5. 自分なりの生き方を考え、述べる</p> <p>定義；他者の生老病死にかかわることを通して、自らの専門職としてのあり方について考え、表現する。</p>	対象者との出会いを通して、生老病死を支える看護の在り方と、そこに至るまでの自分自身の課題について他者に伝えるように説明できた	対象者との出会いを通して、生老病死についての自己の考えを他者に伝えるように表現できた	対象者との出会いを通して、看護の在り方について考えた	対象者との出会いを通して、自分自身の中に生じた思いを述べることができた	出会った対象者について説明できた

※「対象者」とは、看護を提供する対象となる個人はもちろん、個人を取り巻く、また看護の対象となる家族、職場、学校、地域などの集団を含む

図2 臨地実習ルーブリック(実習をとおして身につける力)の「共生」



表3 模擬体験における日常生活動作および手段的日常生活動作の内容

項目	具体的内容(例)	対象者
1) 歩行(走行)	<ul style="list-style-type: none"> <li>歩行(走行)、階段(片麻痺は除く)</li> <li>エレベーターでの上り下り</li> </ul>	妊婦 高齢者 障がい者
2) 飲食	<ul style="list-style-type: none"> <li>箸・スプーンを使用して食事をする</li> <li>ビニール小袋を開封して食事をする</li> <li>ペットボトルのフタを開けて飲水する</li> </ul>	高齢者 障がい者
3) ベッドへ移動・動作	<ul style="list-style-type: none"> <li>(車いすから) ベッドに移動し、端座位となる</li> </ul>	障がい者
	<ul style="list-style-type: none"> <li>靴の着脱をする</li> <li>ベッドに臥床し、寝返り・起き上がりをする</li> </ul>	妊婦 障がい者
4) 洗濯物を干す・たたむ	<ul style="list-style-type: none"> <li>洗濯カゴから洗濯物を取り出す</li> <li>スタンド型室内物干しに洗濯物を干す・たたむ</li> </ul>	妊婦
5) 買い物	<ul style="list-style-type: none"> <li>財布からお金を取り出す</li> <li>自動販売機で商品を買ひ、取り出す</li> </ul>	高齢者
	<ul style="list-style-type: none"> <li>買い物袋を持って歩く</li> </ul>	妊婦
6) 音を聞く・文字を読む	<ul style="list-style-type: none"> <li>音楽を聴く(聞こえ方の違い)</li> <li>文字を読む(見え方の違い)</li> </ul>	高齢者
7) きょうだいの育児	<ul style="list-style-type: none"> <li>新生児ケア人形を抱いてあやす</li> <li>新生児ケア人形をベビーカーに乗せる・降ろす</li> <li>ベビーカーを押す</li> </ul>	妊婦

実施中の2段階目を2回行う)。模擬体験実施前に行う1段階目のグループワークでは、事前学習を基に、日常生活動作の弊害となりうる部分や対象者の心身の状態を考慮し、どのようなことが起こる可能性があるのか、どのようなことに気を付ける必要があるのかについて考えたことをグループでまとめていく。模擬体験実施中に行う2段階目のグループワークでは、模擬体験の実施を重ねることで気づいたことを振り返り、次の実施につなげることができるように方法を検討する。内容としては、どのような状況でどのような弊害が生じ、その際、どのような気持ちを抱いたかである。また、どのような工夫をすることや、どのような支援があることで、弊害を軽減することができるかなどについてディスカッションを行う。併せて、なくすことのできない弊害はあったか、その際の気持ちについても加えた。さらに、模擬体験を実施する際に気をつけることについてもまとめ、次の実施につなげた。模擬体験実施後に行う3段階目のグループワークでは、模擬体験実施中のグループワークで話し合った回数を重ねたことによる変化や工夫に加えて、体験から考えたことについてグループでディスカッションをする。そして、対象者が地域住民の一員として「ともに生きる」ために大切なことや、求められることについてグループで意見をまとめていく。最後に、模擬体験を通じた学びをグループ毎に発表し学びの共有を図る。

なお、第1～3段階のグループワークでは、段階・内容ごとに色の異なる付箋を用いて行うことで思考のプロセスを可視化できるようにした。最後のグループ毎の発表では、これまでの付箋と模造紙を用いて、模擬体験での学びの統合を図っていく。

### 3) 学生の学修状況・取り組みに合わせた支援

カリキュラム改正にともない、日常生活行動に対する援助技術について学修する科目である生活行動援助論は2年次後学期に受講する。そのため、安全面に十分配慮できるように教員の配置や導線の確保を検討した。さらに、模擬体験の媒体装着方法および注意点についてはマニュアルを作成し、媒体の装着の介助は教員が行う。また、車椅子の使用については、作成した資料をもとに、車椅子への乗り降りの際はブレーキをかけ、フットレストをあげることを忘れないことなど基本的なことから指導を行ったうえで、模擬体験を開始する。模擬体験の実施中は実施を重ねることで気づいたことをその場で振り返り、次の実施につなげることができるように意識づけを行った。さらに、基礎II実習と同じ2年次前学期の開講科目である、健康生活支援論や各領域における看護学概論科目と関連させて学んでいくことができるように支援していくことで、理論と実践の統合を促していく。

## 8. 学内実習②—体験者の語りと対話から多様性の内実を理解する—

学内実習②では、一見すると学生とは異なるように生活をしている当事者らをゲストスピーカーとして招聘し、経験の語りと対話を通して、多様性とは何かという内実の理解につなげることができるようプログラムの構成を検討した。学内実習②における到達目標は以下4項目を設定した。

### 【到達目標】

- 当事者の生活経験に関心を寄せて聞くことができる
- 当事者の視点に立った病いや地域で生きることの理解ができる
- 患者の語りやグループワークを通して、多様性とはどのようなことなのかを言語化することができる
- 学生間ディスカッションを通して自分の価値観を深め、言語化することができる

### 1) 実習方法・内容

学内実習②では、①当事者の話を聴く→②当事者と対話する→③当事者に気づきや学びを伝えるという流れで対話を進めていく。この実習では、社会とのつながりの一翼を担うことを目的に当事者の方のお迎えやご案内、対話の際の司会進行などの運営を学生主体で行うこととする。まずは、事前学習として当事者の方の日常生活について想像し、そこから当事者の方への質問や対話をするうえでどのようなことに配慮する必要があるのか考えたことをグループワークで共有する。これらの共有をふまえて、当事者の話を聴き、対話し、気づき・学びを伝えるという当事者とのやりとりのなかで多様性の内実を理解することができるプログラムを設定した。

### 2) グループワークの概要

当事者との対話前のグループワークは前述のとおりである。対話後のグループワークでは、当事者との語り合いを振り返り、学びや気づきの共有とディスカッションを行う。ディスカッションの内容は、えんたくん（丸形段ボール）にまとめていく。グループ間での共有が終わった後、ワールドカフェ方式で自身のグループで共有した学び・気づきを他のグループのメンバーと共有し深めて

いく。新たな気づきについてはえんたくんに記載し、最終的には最初のグループに戻り、ディスカッションを経て多角的な視点から「多様性はどのようなことなのか」について深めていく。

### 3) 学生の学修状況・取り組みに合わせた支援

学内実習②は実習の後半にプログラムを設定しているため、臨地実習や学内実習①をとおして、生活や価値観の多様性について感じたり、考えたりする機会をもっている。このプログラムでは、「多様性を理解する」とはどのようなことなのか、その考え方を身に付けること目的にグループのディスカッションが進められるように促していく。そして、他者との違いを「人それぞれで良い」ということだけで終わらせるのではなく、多様性を認めるなかにも、他者との対話を通じて探求し続けることの大切さに気づけるように促していく。

### 4) 実習記録を通しての気づきの深化

事後のワークとして個人でさらに考えを深められるように、以下の3点の問い—「あなたとどこが同じでどこが異なりますか」「多様性とはどのようなことだと考えますか」「多様性を共に認め合う地域社会の実現のために、あなたができることを述べてください」—を設けた。同じや異なるということをどのように考えるのか、排除や区別でもなく同一化でもなく、その都度思考する態度を身に付けることを、記録を通して促すことを狙った。

## 9. 実習の振り返りとまとめ

### 1) 実習の振り返りとまとめ①（最終日前日）

基礎Ⅱ実習を通して考えたことを共有し、地域で暮らす多様な人々への看護職のかかわりについて考察することを目的に、到達目標は以下4項目を設定した。

### 【到達目標】

- 実習を通して出会った「地域で暮らす人々」の中から一人を選び、特徴（健康状態、生活、価値観など）と自身の心の動きや考えたことを整理し、グループメンバーに伝えることができる
- グループメンバーが実習を通して出会った「地域で暮らす人々」の特徴とメンバーの心の動きや考えたことを理解することができる
- グループ間で共有した「地域で暮らす人々」の

中から1人を選び、看護職としてどのように関わっていくのか、相手(対象者)や自分(学生)の気持ちを大切にしながら整理することができる

- 多様な人々の中で看護職が担う役割について考察できる

事前課題として、実習の振り返りとまとめ①では実習を通して出会った「地域で暮らす人々」の中から、最も印象に残っている方を一人選び、その人との出会い、かかわりを通して考えたことや自身の心の動きをできるだけ詳細に振り返りながら整理していく。グループディスカッションでは、事前学習の内容を共有し、「地域で暮らす多様な人々」にかかわる「看護職」のかかわりを考察し、発表を通して全体共有をしていく。

## 2) 実習の振り返りとまとめ②(最終日)

基礎Ⅱ実習での学びをふまえ、多様性を尊重することの具現化、看護職になるために看護学生としてできる明確化することを目的に、到達目標は以下5項目を設定した。

### 【到達目標】

- 実習を通して学んだ「地域で暮らす人々の健康状態・生活・価値観」の多様性に関する自身の考えを、グループメンバーにわかりやすく伝えることができる
- グループメンバーの学びや考えを理解し、自身の学び・考えとの共通点・相違点について考えることができる
- 看護専門職にとって、多様性を理解する意味を考え、「地域で暮らす多様な人々」と共生できる「看護職」になるため卒業までにできることを書きだすことができる
- 他者の生活や価値観を尊重する態度を示すことができたか、実習中の態度を振り返り、自身の特徴と向き合うことができる
- 実習記録を整理・完成し、提出期限までに提出することができる

学内実習②はグループごとに異なる当事者の方から語りをうかがっているため、グループをシャッフルし、「語り手の紹介・語りの中で印象に残ったところ」「当事者との相違(同じだと感じたこと、異なると感じたこと)」について共有し、グループディスカッションを行う。

全てのプログラムの内容をふまえて、前日の実習の振り返りとまとめ①のグループで「多様性尊重の具現化」、「地域で暮らす多様な人々」と共生できる「看護職」になるために、卒業までにできること・やるべきことについて考察し、発表を通して全体共有をしていく。

## V. まとめ

基礎Ⅱ実習を振り返りまとめてみると、患者ニーズの多様化・複雑化に対応した看護職、多様な場において多職種と連携して適切な看護実践ができる看護職を育てるうえで多様性を理解・尊重し、倫理観を養うことを目的とした実習プログラムを構築したことは意義があったと考える。基礎Ⅱ実習においては、地域で暮らす人々の多様性や価値観にふれるとともに、多くのグループワークをとおして、他学生の価値観に目を向け、自己の価値観を見つめる機会となったと考える。実習指導者と教員の振り返りのなかでも対象者との関わりのなかから多くの気づきが得られていたと報告された。このように、対象者との関わりを大切にしながら相手の考えや意見、感情を引き出すコミュニケーションと相手の価値観をとらえるための対話が多様性を理解するためには重要であると考え。他方で、地域における実習(臨地実習)においては、各1日ずつのプログラムだったことから、目標達成に至っていない可能性も指摘されたため、プログラムの構成を検討していくことが必要である。

また、模擬体験や当事者との語り・対話のプログラムにおいては、当事者の日常生活における困難さを理解するだけでなく、当事者のできることにも着目し、できることを増やしていく支援の大切さや、まずは自分自身と向き合うということの大切さに気づくことができていたのではないかと実感している。このプログラムを通して、当事者と共に生きるうえで必要なことを考えるなかで、看護職としてのあり方を具現化することにつながったのではないかと考える。さらに、大巖寺・淑徳アーカイブズ見学実習は、教員間の振り返りにおいてプログラムの目的と意図を学生に理解できるように説明することの必要性が検討された。本学の建学の精神である利他共生の理解を深めると

ともに、宗教と人々の関わりの大切さや、地域で生活する人々の精神的な拠り所としてお寺が存在することの意味など多様性の理解と関連付けてとらえられるように支援していくことが求められる。

そして、教員も保健医療従事者を育成する観点から多様性を理解することの意味を問い直し、一貫性をもって指導できるように実習方法・内容を検討していくことが重要である。看護職は多様な場面において、自己決定しながら多職種と協働し、対象へケアを提供しており、主体性をもって行動することが求められる。基礎Ⅱ実習においても主体性を育むための仕掛けを組み込んだが、学生の主体性に差異があった印象をもっている教員もいた。学生が主体的に実習に取り組み、自分事としてとらえ安心して学びを深められるような環境を整えていくことも重要である。

カリキュラム改正における、本学科基礎Ⅱ実習のプログラムの開発過程、内容を振り返り、次年度以降の課題について検討を行った。実習目的・目標を達成できるとともに、学生が主体的に学びながら看護実践能力を高め、講義・演習と結びつく実習経験となることが重要である。今後も実習プログラムの評価を継続して行い、本学科の独自性のある実習プログラムとなるように実習方法・内容を検討し続けていくことが求められる。

今後は、基礎Ⅱ実習を通して学生がどのような学びを得たのか分析し、基礎Ⅱ実習プログラムを検討していくことも必要である。

## VI. 利益相反

本研究において、記載すべき利益相反はありません。

### 謝辞

本学科、基礎看護学実習Ⅱ（地域で暮らす人々との共生）において、学生を受け入れ、ご指導くださいました実習施設の皆様、外部講師の先生、貴重なご経験をお話くださったゲストスピーカーの皆様に感謝申し上げます。

### 文献

千葉市 (2023). 千葉市いきいきプラザ・センター

事業運営. 2023年9月14日アクセス, <https://www.city.chiba.jp/hokenfukushi/koreishogai/korei/ikiiki-dankaisedaikanren.html>

岩田真弓 (2017). 看護実践における異文化間コミュニケーションの促進のための課題と方策に関する文献検討. 日本国際看護学会誌, 4(2), 12-22.

甲斐ゆりあ, 安藤敬子, 清村紀子 (2019). 日本の看護ケアにおける宗教的配慮の現状に関する実態調査. 看護科学研究, 17(1), 22-27.

掛谷和美, 藤田千春 (2021). 経済連携協定 (EPA) における我が国の外国人看護師候補者への支援課題に関する文献検討. 日本健康学会誌, 87 (3), 121-130.

厚生労働省 (2016). 「地域共生社会」の実現に向けて (当面の改革工程). 2023年9月25日アクセス, [https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu\\_Shakaihoshoutantou/0000150632.pdf](https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000150632.pdf)

厚生労働省 (2019). 看護基礎教育検討会報告書. 2023年9月25日アクセス, <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>

文部科学省 (2017). 看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～. 2023年9月14日アクセス, [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1217788\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1217788_3.pdf)

文部科学省 (2020). 看護学実習ガイドライン. 2023年9月14日アクセス, [https://www.mext.go.jp/content/20200330-mxt\\_igaku-000006272\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200330-mxt_igaku-000006272_1.pdf)

日本看護協会 (2019). 日本看護協会 看護が支える地域共生社会－全員参加型社会の実現を目指して－. 2023年9月20日アクセス, [https://www.nurse.or.jp/home/about/kyokainews/pdf/2019/rensai\\_chiikikyosei\\_01.pdf](https://www.nurse.or.jp/home/about/kyokainews/pdf/2019/rensai_chiikikyosei_01.pdf)

佐藤奈保 (2018). 育成期家族の多様性と“拡大する”小児看護－多様化すること, 変わらないこと－. 看護教育, 59(11), 962-968.

淑徳大学 (2023). 淑徳大学 建学の精神. 2023年9月20日アクセス, <https://www.shukutoku.ac.jp/university/about/spirit.html>

谷口陽子 (2020). 多様性を重視した、次世代看護職の育成. 2023年10月11日アクセス, [https://www.jstage.jst.go.jp/article/npc/2020.2/0/2020.2\\_S1-1/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/npc/2020.2/0/2020.2_S1-1/_pdf/-char/ja)

谷本真理子, 山崎千寿子, 本谷園子 他 (2020). 日本人看護師の外国人患者対応力向上に向けた実践的課題探究の取り組み. 東京医療保健大学紀要, 14(1), 145-152.

津々木昌子, 氏橋祐太, 白坂成功 他 (2015). 多様性適応力評価尺度の開発と適用の試みー日本ブラインドサッカー協会のワークショップを対象としてー. スポーツ産業学研究, 25, 277-291.

山口裕之 (2022). 「みんな違ってみんないいのか？」ー相対主義と普遍主義の問題ー, ちくまプリマー新書.